

## 高山赤十字病院 外科後期研修プログラム

期 間：外科専門医コース

シニアレジデント：3年（専門医取得準備期間）

チーフレジデント：2年（専門医取得期間）

目 標：

（一般目標）：指導医との1：1の指導の下に患者の病態を学習し、外科基本手技・手術適応・標準的  
手術手技を学び、一般外科医とし責任を持って外科疾患の診断・治療が行える知識・技量を獲得する。  
チーム医療の一員としての円滑な連携に必要な知識・技能と態度を身につける。

（個別目標）

1. 3年終了時に外科専門医試験を受験するために必要な症例数を経験する。
2. 術者として、胃・結腸・乳腺・胆石・ヘルニア・虫垂炎手術を完遂できる。
3. 食道・肝胆膵・直腸などの難易度の高い手術の第1助手を担当できる。
4. 責任を持って病棟での術前・術後管理を担当できる。
5. 投与方法やその副作用を十分理解し、外来・病棟で癌化学療法を行える。
6. 緩和医療を実践できる。
7. 外科外来で、初診、および継続診療を行える。
8. 救急外来における外科系疾患の診療を行える。
9. 救命センターにおいて外科系の対応ができる。
10. 外来・病棟・手術室で研修医・医学生の指導ができる。
11. 3年間の研修中に麻酔科標榜医の資格を取得する。
12. ACLS、JPTEC、BTLS、JATECを受講し、その実践ができる。

方 略：

1. 指導医とともに入院患者の主治医となり、手術・術前術後管理を担当する。手術は、指導医の指導判断のもとに、段階的に執刀経験を拡大する。
2. 指導医とともに、癌再発患者の主治医となり、化学療法の投与量・投与方法、および副作用の対処法を習得する。また癌末期に至った場合には、指導医の指導のもとに疼痛コントロールを含めた緩和ケアを実践する。
3. 入院担当患者が、当院外来で継続して化学療法を含めた通院加療を受ける場合は、指導医の指導のもとに、これを担当する。
4. 外来を週1回担当し、指導医の指導のもとに、ヘルニア、虫垂炎、痔疾、胆石症などの診断法、治療計画を習得する。また切開排膿、創傷部縫合などの外来小手術を担当する。
5. 週1回（水曜日夕）の外科・消化器内科・放射線科・病理検査科の合同カンファレンスにて術前・術後症例を検討することにより、消化器画像診断・病理診断の基礎を習得する。希望に応じて上部・下部消化器内視鏡検査、腹部超音波検査、上部消化管透視、注腸検査の指導を受け、これらの検

査技術を習得することができる。

6. 週1回(月曜日午後)の術前カンファレンスで症例提示を行いプレゼンテーションの技術を習得する。

7. レジデント期間を通して、病棟・手術室で研修医・医学生に診察法、電子カルテ記載法、系結びなどを指導するとともに、2年次以降は1年次レジデントの診療の相談・指導にもあたり、教えることにより自分も学習する習慣を身につける。

8. 月に2～3回の外科系当直医として外科系救急患者の診療を担当する。2年目以降は外科待機を月に5回程度担当する。必要時には救命部や各科オンコール医の指導を受けるとともに、研修医の指導にもあたる。

9. 当外科は麻酔科・救急部も兼ねており、3年間の研修中、外科系救急疾患の診療を研修し、同時に麻酔科研修も行い麻酔科標榜医の資格を取得する。

10. 適宜、学会発表および論文投稿の指導を受け、外科専門医・消化器外科専門医試験の準備をする。

11. 外科専門医試験に必要な心臓血管外科の手術・治療経験は、京都大学心臓血管外科関連施設へのローテーションで達成する。

評価：

1. 毎年、受け持ち症例リストを指導医に提出する。

2. 指導医は、そのリストをもとに、経験疾患に偏りのないこと、外科専門医試験に必要な症例数の到達度を確認し、3年間で不足無きよう計画する。

経験すべき症例数：

参考として日本外科学会の外科専門医到達目標数を以下に示す。

1. 消化管および腹部内臓：50例
2. 乳腺：10例
3. 呼吸器：10例
4. 心臓・大血管：10例
5. 末梢血管：10例
6. 頭頸部・体表・内分泌外科：10例
7. 小児外科：10例
8. 外傷：10例
9. 鏡視下手術：10例

上記症例数は3年間の研修期間中に、到達可能である。

週間スケジュール：

手術日	定期	火曜日、木曜日
外来		各医師に割り当てられた曜日
部長回診		月曜日 PM2:00
カンファレンス	月曜日	PM1:00 術前カンファレンス
	水曜日	PM5:10 内科・外科合同カンファレンス
	水曜日	PM6:30 術後カンファレンス
英文抄読会		木曜日 AM8:00